

# ブルーベリー・ポット栽培以外 (品種：ラビットアイ系中心)

長生農業事務所

## 1 地区名

睦沢町北山田

## 2 栽培戸数、面積、収穫量又は出荷量、出荷先又は販売方法

- (1) 栽培戸数 1戸
- (2) 栽培面積 13a
- (3) 収穫量又は出荷量 400kg (平成22年度実績)
- (4) 出荷先又は販売方法 観光もぎ取り、直売出荷

## 3 ちばエコ基準達成状況

区分	実施状況	ちばエコ基準
化学合成農薬 (成分回数)	0回	3回
化学肥料 (窒素成分量)	0kg/10a	4.5kg/10a

## 4 事例のあらまし

睦沢町は水稲中心の稲作経営が主体の地域ですが、ウメ (町の木に指定)、イチジクなどの果樹栽培も盛んで、最近では直売所で人気のあるブルーベリーの栽培を行う方が増えています。生産者は認証取得による差別化を一つの目的として、「ちばエコ農産物」栽培基準以内での栽培に取り組みました。

基準内での栽培を行うため、病虫害防除では耕種的防除等予防に努め、肥料ではなたね油かす粉末の投入を中心にするなど、栽培技術に関して工夫を重ねました。

その結果、化学合成農薬の使用回数は0回、化学肥料由来の窒素成分は10a換算で0kgと、ちばエコ農産物栽培基準を大幅に下回る無化学肥料・無農薬での栽培を行うことが出来ました。生産されたブルーベリーは、直売所や収穫体験に訪れた消費者から糖度と酸味のバランスが良いと、食味に関して高い評価を受けています。

## 5 背景・動機

この取り組みを行う生産者がブルーベリーの栽培を開始したのは、平成17年からです。数ある果樹の中でブルーベリーを選んだ理由の一つは、病害虫に強い品目であるということでした。その3年後、少しずつ収穫が出来る段階になってから、「ちばエコ農産物」認証を取得しました。栽培のモットーは農薬を全く使わず安心して、かつ市場流通には出回らない完熟した果実を消費者の皆さんに提供するという事です。ブルーベリーはこうした要望に最も適した品目だったといえます。

販売は摘み取り体験を中心に、過剰にとれた分を直売などに出荷するという形態を取っています。品種の選定は摘み取りをメインに考えていることから、大粒で豊産生の品種を中心に選んでいます。ラビットアイ系を中心にウッドワード、ティフブルー、ホームベル、ブルージェムなどを栽培しています。品種ごとの収穫時期が短いことを考慮し、様々な品種を植えることで7月中旬から8月末までの1ヵ月弱の開園が可能となりました。完熟果で摘み取り・販売を行うということから、おいしいブルーベリーを食べたいというお客さんにとっては大きな満足感が得られるものとなっているようです。

栽培規模や生産者数が徐々に増加しつつあるブルーベリーで、「ちばエコ農産物」認証を取得するこの生産者の取り組みは、地域でも注目の的となっています。定植してから6年がたち、成園化の一手手前まで来ています。来年以降の本格出荷の段階になっても継続的に「ちばエコ農産物」認証を取得することで、地域への波及効果も大いに期待されます。



大粒の果実がたわわに実っています



ちょっとした高原気分を味わえるほ場です

## 6 栽培方法

### (1) 土づくり

基肥は1月下旬になたね油かす粉末を45 kg/10 a 投入し、化学合成肥料由来の窒素成分に頼らない土づくりを行いました。

### (2) 病虫害防除

無農薬栽培を行っているため、病虫害対策に関しては早期発見・早期対策を基本に、生育ステージごとにポイントを絞った耕種的防除を徹底的に行っています。

#### ア 落葉期及び休眠期

落葉や枝を観察し、病斑、卵塊、越冬繭、虫ふん、木屑を探します。病斑などの被害葉は集めてからほ場外の焼却場で処分します。無農薬散布をモットーに栽培しているので、この時期に徹底的に補殺等を行い、それ以降の病虫害発生を可能な限り抑え込んでいます。

#### イ 開花期～結果期

開花や結果の様子や新梢の褐変、枯死の発生を注意深く観察し、異常があった場合は速やかに取り除くとともに、周辺に潜む害虫がいれば補殺します。

菌核病は発病部位に菌核が形成される前に摘除して、早急にほ場外に持ち出し、土中に埋めます。

#### ウ 果実肥大期～収穫期

果実の吸汁害や食害の状況を観察し、異常があった場合は速やかに取り除くとともに、周辺に潜む害虫がいれば補殺します。地面に落下した果実は適宜取り除きほ場を清潔に保つことで、ショウジョウバエなどの害虫が寄り付かないよう注意しています。

#### エ 通年

主軸枝の地際部を観察し、虫ふんの噴出や木屑を探します。これが見つけられた際はカミキリムシ類の幼虫による食害が疑われるので、食入孔に針金を差し込んで刺殺します。また、早朝の見回りで飛来したカミキリムシの成虫を補殺します。

### (3) 有害鳥獣対策

集落と山林の境にほ場があることから、ハクビシン・アライグマなどの有害鳥獣被害がみられます。箱罠を設置することで少しでも個体数を減らし、被害の軽減を図ろうと努力しています。

ア 栽培管理

作業名	実施年月日
前作収穫終了	平成 22 年 8 月 31 日
収穫開始	平成 23 年 7 月 16 日
収穫終了	8 月 31 日

イ 使用資材

(ア) 土づくり・施肥等

(10a あたり)

使用銘柄 (N : P : K)	実施年月日	施用量	全N	化学N
もみがら	平成 22 年 9 月 20 日	3.5t		
粒状とん骨リン	平成 23 年 1 月 20 日	45kg		
なたね油かす粉末	1 月 20 日	110kg	5.83kg	0 kg
合 計			5.83kg	0 kg

(イ) 病虫害・雑草防除等

使用農薬	対象病虫害	実施年月日
(使用農薬なし)	—	—

7 今後の展望等

来年は定植後 7 年目となり、10 a あたりの収量も飛躍的に増える樹齢を迎えます。現状の収量はまだまだ物足りないものですが、これからは本格的な収穫が期待できる段階のため、今以上の P R 等を行うことで摘み取り体験者数を飛躍的に増やす必要があります。

生産者は、「ちばエコ農産物」認証の取得を P R 手段・差別化の手段の一つとして考えています。その期待にこたえていくためにも、県・J A・市町村等の関係機関と連携し、ちばエコ認証の効果的な利用によって大きく経営改善が出来たという一つの成功事例になるように、支援することが求められます。